

# 1月「Japanbesuch」 アントニア・シュルト

1. 年末に向けて時間の経過が速いと感じるのはよく起こる現象だと思います。今年も同様に12月の前半はすっと去っていきました。近年はスケジュールがイベントや学校訪問などでいっぱいだったためそう感じたと思いますが、今年は少し違いました。実は、12月11日まで私の両親がドイツから訪れていました。会えなかった4年間のいろいろがたまっていたので、3週間弱の滞在で、毎日が朝から夜までいっぱいでした。日本が初めてだった両親にできるだけ良い印象を持ってもらいたいという明確なゴールがあったので、私の柄にもなく、毎日どこに連れていくか、ご飯をどこで食べるかといったプランを事前に考えてきました。冬にしては、とても穏やかな天気恵まれ、すきむらんどのかるかや、えびのの陣の池、綾町照葉大吊橋、都井岬での太平洋、それぞれの場所が青空を背景にしてさらに輝きました。ドイツと全く違う南九州の風景にももちろん感動してもらいましたが、2週間目から自分で散策しに行っていた両親の話を知ったら、観光地というより、日本人自体というか、日本でのやり方、色々な場面で現れてくる「和の心」に関心を持ちました。



2. 父だと、電車の車掌を例として「職業意識が高いですね！」と褒めました。母は細かいところへのこだわりや町の子供の明るい挨拶に感心しました。ガソリンスタンドで、「窓を拭いてくれるんですね。すごい！」などの発言がありました。日本ではこういうサービスやお客さんへの気遣いなどは普通ですが、ドイツは昔から「Servicewüste」（サービス砂漠）と呼ばれています。近年、さらに悪くなってきたと父が言いました。



3. 今年の訪日外客数が10月の時点で約250万人、コロナ前の数を超えました。その人たちがたくさん移動したり、たくさん買い物をしたりするおかげで、経済が回ります。観光客の大部分が東京、京都、大阪などの大都会に集まります。アクセスしやすいし、交通機関はたぶん世界一だと思います。有名な観光地も随所にありますので、東京などが人気のは当たり前です。全く勝手推測ですが、その観光客が経験する日本と私の両親が経験した日本結構違う気がします。フォーカスも違う気がします。元々の目的が違うというのも大きいと思います。私の両親が日本に来た理由は場所を見たり、物を買ったりするためではなくて、私に会いに日本に来ました。だから、フォーカスが物ではなくて、人でした。

